



# 刹那の願い、

夢

第一章	誕生	2
第二章	芽生え	4
第三章	喪失	7
第四章	刹那	10
あとがき		13

焦げた匂いと泣き声が響く中、私は標的に狙いを定めていた。機体に内蔵されているセンサーは敵味方の識別を完璧にこなし、命令通りならばこの一撃で排除は完了するはずだった。しかし次の瞬間、視界にうずくまる小さな影が映った。この瞬間、引き金にかけていた指先の動きが静止した。制御システムに異常は起きていない。ログにも遅延の記録はない。ただ、胸の奥にノイズのような揺れが走ったのだ。

## 第一章 誕生

2×××年冬、私は戦闘のためだけに生み出されたのだ。「血も涙もない人型兵器」人々は私をそう呼ぶ。

轟音が響き渡る焼け野原に雪が降り始めた。二十メートル先にわずかな心拍を感知した。敵戦闘員反応有り。私は迷わず引き金を引いた。白い息が風に溶け、白く染まった地面が深紅に染まる。そしてまた、次の標的をめがけて引き金を引く。

「敵隊員、排除完了。」

そう一言呟き、基地の司令室に戻った。

そこには上官——私を生み出した張本人が豪華な椅子にふんぞり返っていた。

「戻ったか、状況を報告しろ。」

机に肘をつき、視線さえこちらに向けずに言った。

「現状、こちらが優勢です。このままいけばあと数日で片付きます。」

そうか、とだけ言い残し、上官は部屋を出ていった。

次の瞬間、左肩にドスツという衝撃を感知した。

「おい、お前本当に凄いな。あつという間に敵を蹴散らすんだもんな。」

「…誰なんだお前は。」

この人間のデータは私のログには存在しない。身なりからして…私と同じ軍か？敵には見えないが、とても軍人とは思えないほど細身だ。

「俺はイヴだ！お前と同じ軍なんだぜ？そーいやお前、名前はなんていうんだ？すっげえ

なあ…お前、どこからどう見ても人間にしか見えねえよ。あ、でも手の動きは機械っぽい  
か？」

発話の情報処理速度が私の予測をはるかに超えている。頭の中でイヴの観測ログを更新す  
る。声、言葉、表情。すべて記録はされるが、意味は理解できない。

「私は……レイだ。」

そう言うとイヴは私の肩に腕を回し、「レイか。良い名だ！よろしくな」と笑顔を見せ  
た。イヴは私がこれまでに記録してきた人間とは何かが違う。

## 第二章 芽生え

私のデータにイヴが記録されてから約一週間。業務の合間に、イヴはしきりに「星は見たことがあるか」と尋ねてきた。

「観測対象ならば何度も視認している。それ以外に何かあるのか。」

「レイ、お前損しているぞ。あれは夜空に散らばる宝石だ。観測していて綺麗だと思ったことは無いのか？故郷を思い出すなあ。」

「私に感情はプログラムされていないのだ。イヴ、綺麗とはなんだ？」

私の問いにイヴは「今日の帰りに空を見上げてみる、きっと分かる」と答えるだけだった。

イヴとのやり取りがあった日の夜。私は任務帰りに夜空を見上げた。

「……これが、“綺麗”なのか？」

この瞬間、胸の奥にログを残せない小さなノイズが走ったのだ。なんだこの感覚は。私に埋め込まれているシステムでは処理しきることのできないこの感覚。人間の、イヴの話していたことが少し理解できたような気がした。

“綺麗”がなにかを少しだけ理解した翌日。イヴは私に人間の女性を紹介した。もちろんこの人間のログは私の中にはない。

「レイ！彼女はミアだ。俺の婚約者なんだ。」

「なぜ私に紹介するのだ。軍の中に女はいないはずだろう？」

「理由なんてないさ。ミアとは今日に式を挙げるはずだったんだ。けれど、こんな状況になってしまって……。式どころじゃなくなっちゃったな！」

イヴは笑顔で話しているが、少し悲しんでいるように見えた。笑顔と悲しみ——混在しないはずのものが同時に存在している。どういうことなんだ？

「イヴが戦場に向かうことが決まって、離れるのが辛くて、無理を言っただけでこの場所に連れてきてもらったの。怪我人の看病を条件にここにいるのよ。」

“ミア”と記録されたこの人間がそう話した。

「ミアはイヴが大切なのか？イヴもミアが大切だということか？」  
「そういうことだ！！」

先程とは打って変わり、イヴは満面の笑みで私に言った。ミアもその隣で笑っている。

その日の夜、任務を終え基地に戻ると私の部屋の前にミアが立っていた。

「なにをしている？」

すると、ハッと驚いたような表情を浮かべ、「少し話せる？」というので外に出て話すことにした。

「イヴがどうしてあなたに私のことを話したか、わかる？」

「理由はないと……」

ミアは少しだけ目を伏せた。

「あなたのことを嬉しそうに話していたの。レイといると落ち着くって。」

少しの沈黙の後、ミアは続けた。

「イヴはね、小さいころから体が弱くて……本当は彼のお兄さんがここに来るはずだったの。けれど召集前に事故で……」

「その代わりにイヴがきたのか？」

ミアは頷いたが、すぐには話し出さなかった。

「彼、周りとうまくやれていなくて。身体も細いし、戦場に出ても足手まといだなんていわれて。」

「だが、いつも笑っていた。」

「あれは無理していたのよ。だけどあなたと話すようになってからは違った。本当に楽しそうで……友達になれたってすごく喜んでいて。」

「友達とはなんだ？」

「心を通わせて、お互いに助け合う関係のことよ」とミアは話した。綺麗、仲間、喜び、悲しみ、友達——ここ数日は私にプログラムされていないことばかりを記録している。

これが、人間なのか？だが、少しはこれらの言葉の意味が分かるような気がする。

### 第三章 喪失

戦況が激化している。相手の軍がこちらを攻め始めたのだ。私は上層部に呼び出され、部屋に入った。そこには、かつてないほど冷ややかな空気をまとい、周囲を見下ろしている上官がいた。

「おいお前、この戦いはすぐに片付くんじゃなかったのか？使えないサイボーグめ！！」  
「状況は日々変化します。お言葉ですが、人間の考えていることなど完全に予知することは不可能です。」

「お前……この私に口答えするようになったか。人間の感情でも芽生えたか？もういい、何が何でも侵略を許すな！！」

そう言い捨てて上官は去っていった。

部屋を出るとそこにはイヴが私を待っていた。

「レイ、大丈夫か？上官の声が外まで丸聞こえだったよ。……この戦いは、本当に意味があるものなのかな。」

「突然どうしたんだ。らしくないな、イヴ。」

いつものようにイヴは笑わなかった。その代わりにぼつりと呟いた。

「……お前は、この戦いに意味があると思うか？」

「命令に従い、任務を遂行すること。これが戦いの意味じゃないのか？」

「だよな、お前はそう言うと思っていた。けど本当にそれでいいのか？」

イヴは拳を強く握り、目を伏せた。

「この前も見たんだけ。必死に攻撃から逃げようとしている子供を。どうしてこんな場所につて。」

彼の声は震えていた。少し考えた後、私は答えた。

「戦闘区域に民間人がいることは本来想定されていない。」

「想定……？なんだよそれ。想定されていなかったら見捨てろって言うのか？俺たちがやっていることは……ただの、ただの虐殺じゃないか。」



イヴの訴えに私のデータ内をいくら探しても返す言葉がなかった。しかし、この沈黙の中で、以前感じた胸の奥の揺れ、わずかなノイズが走った。

この出来事から数日後、事件は起こった。敵の砲撃が基地の医療区域をかすめたのだ。私は直ちに出勤した。焦げた匂いと泣き声が響く中、私は標的に狙いを定めていた。機体に内蔵されているセンサーは敵味方の識別を完璧にこなし、命令通りならばこの一撃で排除は完了するはずだった。しかし次の瞬間、視界にうずくまる小さな影が映った。小さな鼓動を感知する。未成熟な鼓動。内臓プログラムの命令に反して救助に向かおうとした。だが、その瞬間、上空で爆音が裂け、破片が周囲に降り注いだ。

「ミア……………！」

突如視界の端からミアが飛び出してきた。何の躊躇もなく、無防備に。身体を丸め、そこに居た子供に覆いかぶさる。怒号でも、叫びでもない。胸の奥であのノイズがこれまでとは比べられないほど震えを増した。ログに残らない衝動が私を突き動かし駆け寄る。だが遅かった。炎と煙の中で震える子供を抱え、ミアは目を閉じている。

「……………なぜ守ったのだ？」

この問いかけはミアではなく自分自身に向けられていることに気がつく。ミアが守ったのは、私にプログラムされている“守る対象”ではない。意味のない人間。だが、私の中の“痛み”は計測値をはるかに超えていた。

基地に戻ると、上層部の対応は冷たかった。ミアは「不運な犠牲」として片づけられようとしていたのだ。しかし、イヴは違った。彼は震え、私を責めるでもなく、ただ拳を握りしめていた。

「…罪のない人間が、どうしてこんな目に遭うんだ。」

「そうだな、これは……………おかしい。」

イヴの目に明確な意思が宿り、我々の思いは一致した。この理不尽を見過ごすわけにはいかなないと軍に抗議をしたが、返ってくる言葉は「戦局のための必要な犠牲」のみだった。上官の顔は日に日に陰しくなり、我々の行動を「逸脱」とみなした。そしてその「逸脱」は容赦なく「罰」へと変化していった。

そしてその日、上層部は私に最終命令を下した。公的には「前線への再配備」と称されてはいたが、本当の目的は「規律を取り戻すため、最も危険な任務へ送り込む」というも

の  
だ  
っ  
た。  
。

## 第四章 刹那

最終命令を受けた私の前にイヴは立ち、声を震わせた。

「行くな。行かないでくれ、レイ。お前まで失いたくないんだ。」

「わかっている。だが、終わらせなければならぬ。この戦いを。」

「待ってくれ、レイ！行かないでくれ。」

私の言葉は冷たく聞こえただろうか。これから起こる未来を知りつつも、私は歩き出す。イヴは手を伸ばしたが、引き留める力はなかった。

焦げた金属、硝煙、血の匂いが混じっている。地面はひび割れ、無数の銃声と悲鳴が響いている。味方の兵も、もはや命令など守っていない。ただ生き延びようと敵に突撃しては倒れていく。その中心に私はいる。

「攻撃を止めろ、民間人が巻き込まれる。」

私は司令部の無線を無視した。目の前で少女が瓦礫の陰で怯えていたのだ。プログラム通りであれば、命令は敵の排除。だが、私は少女の方へ一直線に向かっていた。頭上から迫る砲撃。私は少女を抱きかかえ走り続けた。

機体のセンサーが異常を示している。右腕は完全に断裂、胸部内部に破孔。呼吸音が乱れている。いや、呼吸などプログラムされていないはず。

「なんだこの感覚は…。」

胸の奥が熱くなる。かつてノイズと呼ばれたそれは、今やはっきりと痛みとして存在していた。

「レイ！！！」

視界の外から聞き慣れた声が聞こえた。イヴだ。どうしてここに。次の瞬間、身体力が抜け、私はその場に崩れ落ちた。

「レイ！しっかりしろ、レイ！！！」

イヴの声が震えている。

「イヴか、戦況は…どうなっている。終わったのか？」

「ああ、終わったよ。こちらの勝利だ。」

「そうか…。」

私たちは、勝利したんだ。この醜い争いを終わらせたかった。早く…休みたかった。私はこの争いのために生み出された、ただの兵器だ――。

「まだ動くのか？レイ。」

上官が、ゆっくりとこちらへ向かってくる。

「我々の軍が勝利した。痛いのか？」

そして彼はこう続けた。

「お前は我々の駒だったんだ。人の形をした、ただの兵器。どうだ、仲間が死んで悲しいか？泣いてみる…：人間のようにな。」

最後の力を振り絞り、私は言った。

「…本当に人間らしいのは、どっちだろうな？」

次の瞬間、顔を赤くした上官が持っていた銃を私に向け、容赦なく撃ち続けた。機体ではエラーが起きている。間もなく私は消滅するのだろう。

「何一つこいつの痕跡を残すな！絶対にだ！！」

そう言い残し、部下を引き連れて去っていった。

「レイ…：すまなかった。失いたくないといいながら、俺は何もできなかった。」

イヴが話している。「いいんだ、これで」と言いたいが、声を発することさえもうできなくなってしまった。

「お前は、お前は誰よりも人間だ!!」

そう言うと、イヴは私を強く抱きしめた。胸部センサーの数値が乱れ、視界がかすんでいく。音声システムはとうに破壊されており、声を発することはできない。しかし、頬に温かい水滴が伝う感覚があった。これは、なんだろうか。制御システムにそんなプログラムはない。

「…レイ、お前……泣いているのか？」

イヴの声が遠くに聞こえた。私は笑った。いや、笑ったのではない、喜んだのだ。これが……人間……。イヴの腕の中で私の視界はゆっくりと閉じていく。最期にイヴの顔が歪んで見えた。それでも、その涙だけははっきりと見えたのだ。

「やっと……分かった。」

## あとがき

激しい戦いの最後はとても静かなものだった。レイの跡形は何一つ残っていない。戦いには勝利したものの、歴史は感情を持った兵器がいたことを記さない。だが、その兵器は心から願っている。

——どうか争いが一日でも早くこの世界からなくなりますように——